

大きな字で読みやすい

浄土真宗 やわらか法話 4

やわらか法話4・目次

これが私の歩む道	〔漢見 寛恵〕	6
あなたの老後っていつ？	〔守 快信〕	14
またあおう	〔高務 哲量〕	22
つねに私を照らす仏さま	〔宮本 義宣〕	30
「おかげさま」	〔藤澤めぐみ〕	38
今日はアカンかったあ	〔加藤 真悟〕	46
死んだらおしまい？	〔福間 制意〕	54
目的がはつきりすると	〔一二三 智生〕	62
月あかりに照らされて	〔竹本 崇嗣〕	70
ともに輝きあって	〔水之江陽子〕	78
悲しみがひらく世界	〔池信 秀見〕	86
縁起を生きる	〔野呂 靖〕	93

これが私の歩む道

漢^{あや}見^み覚^{かく}恵^え
(滋賀県・純正寺住職)

私たちが、普段から当たり前のように口にしている「浄土真宗」という言葉。ひよっとすると、私たちはこの言葉を、この国でたくさんに枝分かれしている仏教の、ひとつの宗派の名前くらいに思っ
て使っていないでしょうか。

この「浄土真宗」という言葉は、親鸞聖人が書き残してくださっている言葉ですが、実は親鸞聖人の時代には今のようない「浄土真宗」という宗派はまだありませんでした。では、親鸞聖人はどのような意味でこの言葉を用いられたのかというと、それはお念仏を申すということはどういうことかを味わわれた言葉でした。すなわち、お念仏を申すということはお浄土のまことをいただいて生きることであるという意味です。そのみ教えを「浄土真宗」といわれるのです。では、お浄土のまことをいただいて生きるとはどういうことなのでしょう。

お禮^{らい}さんは、平成二十四年の六月に八十八歳でご往生されたお同行^{ぎょう}さんです。私が住職を務める純正寺で、毎朝時間を決めてお勤^{ごん}

めさせていただいている「おあさじ」に、自転車で二十分ほどかけて、欠かさずお参りされていたお同行さんでした。ある年の十二月半ばのこと。夜の七時頃お参りから帰宅した私が本堂の前を歩いていると、暗い本堂正面の階段の所に人影がありました。どなたかなと近寄ってみると、お禮さんではありませんか。

「お禮さん、こんな時間にどうされたのですか」と声をかけると、「ああ、ごえんさん（ご住職）ですかいな。おあさじはまだですか」とおっしゃいます。驚いた私は「こんな所では寒いですから、本堂にお上がりください」と、本堂に灯をともしストーブに火を入れました。ちょうど、お茶菓子に葛湯くずゆをいただいていたので、「とにかく

くあたたまってください」と、お湯でといてすすめました。

しばらくして、落ち着かれてから「寒い中気づかずにごめんなさい。でも、一体こんな時間にどうされたのですか」と私が尋ねると、「ごえんさん、今何時ですか」とお禮さん。「今、ちょうど七時ですよ」と私が答えると「そうでっしゃろ、おあさじは六時半からやのに、今朝はごえんさん寝坊してはりますのかと思うて待ってましたんや」とお禮さんはおっしゃいます。私は内心「これは時間の感覚をなくしてしまわれたか」と思いましたが、混乱されるのを心配しながらも恐る恐る「お禮さん、今は朝ではなくて夜の七時ですよ」と言ってみました。